

〈特集〉

その方法,間違っていますか?

TCHへの対応を見直そう

— TCHマネジメントから見てくる歯科医療の“未来”

木野孔司・佐藤文明

私の「救歯臨床」

BTAテクニック®による天然歯保存の試み

— 第3回 BTAテクニック®の救歯臨床例②

先田寛志

口腔内スキャナー ラボからの報告①

口腔内スキャナーの現在位置

石澤亮一・小川 淳・佐藤康幸

Clinical Progress

熱処理NiTiハンドファイルシステムの可能性を探る

— HandFlexという新しい選択肢

阿部 修

「オープンリソースによるデジタル臨床を考える」日本臨床歯科 CAD/CAM 学会

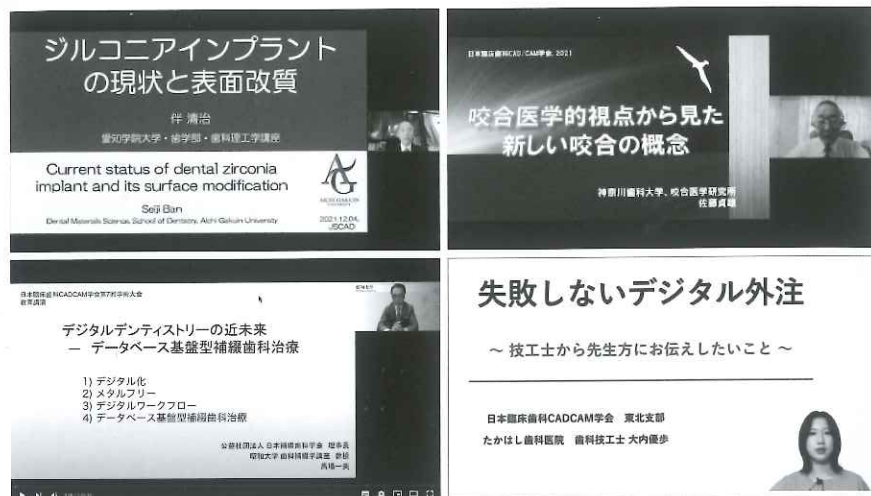
いけだ ゆういち
池田祐一

池田歯科診療所
〒543-0034
大阪市天王寺区松ヶ鼻町7-11
日本臨床歯科CAD/CAM学会

日本臨床歯科 CAD/CAM 学会（蕭敬意理事長）は「オープンリソースによるデジタル臨床を考える」をテーマに、第7回学術大会（北海道学術大会）を、2021年12月4・5日に Web 上で開催した。プログラムは教育講演、シンポジウム、特別講演、歯科技工士セッション、会員発表で構成され、国内はもとより、海外演者を含め、総勢29名が講演を行った。

教育講演では「ジルコニアインプラントの現状と表面改質」と題して愛知学院大学非常勤講師（教授級）の伴清治先生が、「咬合医学的視点から見た新しい咬合の概念」と題して神奈川歯科大学咬合医学研究所特任教授の佐藤貞雄先生が、「デジタルデンティストリーの近未来—データベース基盤型補綴歯科診療」と題して昭和大学歯科補綴学講座教授の馬場一美先生が、それぞれ講演を行った。

伴先生は、国内で認可が待たれる歯科用ジルコニアインプラントの表面改質について最新情報を紹介した。佐藤先生は、咀嚼機能のプラキシズムに注目し、そのグラインディング運動を咬合を考える基本として、患者ごとに適切な咬合を与える必要性について述べた。馬場先生は、デジタルデンティストリーの進歩により治療過程から治療アウトカムま



総勢 29 名の多彩な講師による充実した内容の講演が行われた。

での形態データがすべてデジタル化され、時間的・空間的制限なく共有・利用・保存することが可能になる、いわゆるデータベース基盤型補綴歯科治療について解説した。

シンポジウムでは、「スキャナと加工機の精度：原理と実態」と題して株式会社医科歯科技研代表の藤原芳生氏が、「矯正歯科治療における3次元デジタル技術の応用」と題して大阪大学大学院歯学研究科矯正科講師の谷川千尋先生が、「Digital Dentistry の臨床導入と IOS Selection」と題してモリタ MDSC 所長の片野潤氏が、「Digital practice integration using iTero」と題して Dr.Ingo Baresel が、それぞれ講演を行った。

藤原氏は、デジタルデンティストリーが本格化する中、データの性質や造形に至るプログラム・アーキテクチャ、加工機等についての知識情報を整理する必要性について触れ、デジタル機器の原理的な説明を中心に精度的問題、それらの認識についての誤解等について述べた。谷川先生は、矯正治療の3次元解析に

おける AI の応用について述べ、片野氏は、現在歯科医院に混在するデジタル機器が一つに繋がることでどのようなシナジーが生まれるかを、実臨床のルーティンやデジタルワークフローと共に紹介した。Dr. Baresel は、NIRI (Near InfraRed Imaging) 搭載 Align Technology 社製 IOS 「iTero」の魅力について紹介した。

特別講演では、ビタ社、イボクラールビバデント社、アマンギルバッハ社、デンツプライシロナ社等からの海外演者が参加して、各メーカーの製品の活用について紹介する講演が行われた。

その他に歯科技工士セッションでは、ビタ社公認トレーナーの瓜生田達也技工士による、デジタルによるチェアサイドとラボサイドの連携についての講演があり、また会員発表では、「失敗しないデジタル外注」と題して発表を行った東北支部会員の大内優歩技工士に優秀発表者として特別賞が贈られた。

次回第8回学術大会は、12月3・4日に横浜で開催予定である。